

2025 年度 JESMA 研究支援制度 研究成果報告書

一般社団法人 日本経験サンプリング法協会 殿

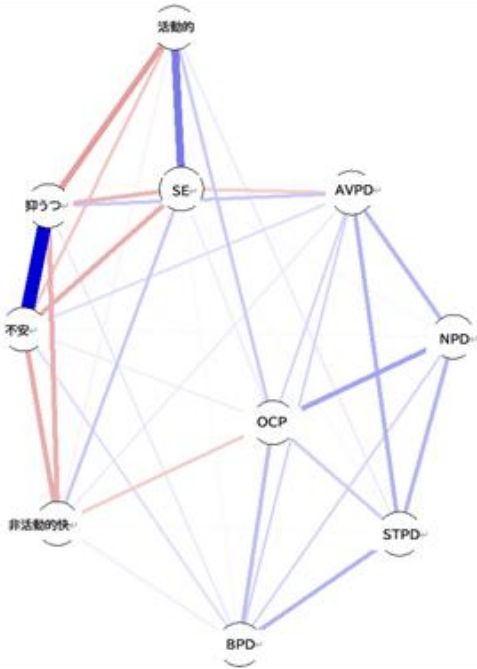
所属名:弘前大学大学院保健学研究科

研究代表者氏名:櫛引 夏歩

この度の研究支援,誠にありがとうございました。研究成果について,下記の通りご報告いたします。

記

1. 研究課題名	パーソナリティ症の症状の変動メカニズムの解明 —日常の感情状態との関連に着目して—
2. 研究目的	パーソナリティ症(以下, PD)は従来, 安定した特性とされてきたが, 近年では, PD の症状そのものが日常的に変動する可能性が指摘されている。本研究では, 境界性・自己愛性・回避性・強迫性・統合失調型 PD に着目し, これらの PD の症状の変動性および日常の感情状態との関連を検討することを目的とした。
3. 方法	2025 年 11 月に, 大学生・大学院生 20 名を対象に予備調査を実施した。参加者には Exkuma を用いて, 3 日間 1 日 6 回, ランダムなタイミングで通知を送信し, PD の症状に関する項目への回答を求めた。2026 年 1 月から 2 月に, 大学生・大学院生 153 名を対象に本調査を実施した。参加者には, 事前調査として, 境界性・自己愛性・回避性・強迫性・統合失調型 PD, 抑うつ症状, 不安傾向, ポジティブ感情(「活動的快」と「非活動的快」), 自尊感情に関する項目への回答を求めた。また, Exkuma を用いて, 7 日間 1 日 6 回, ランダムなタイミングで通知を送信し, PD の症状(予備調査で選定), 抑うつ症状, 不安傾向, ポジティブ感情(「活動的快」と「非活動的快」), 状態自尊感情に関する項目への回答を求めた。
4. 結果	PD の症状を測定する項目の選定を目的とした予備調査では, 各項目の標準偏差および Mean Square of Successive Differences (MSSD) を算出した。これらの結果をふまえ, 日内変動が想定される項目を精査し, 境界性・自己愛性・回避性・強迫性・統合失調型 PD の 5 つについて, 各 3 項目(計 15 項目)を本調査で使用する事とした。 本調査では, まず, PD の症状の平均的水準に関連する心理的変数を検討するために, 各 PD の症状を従属変数とした階層線形モデルを実施した。その結果, 境界性・自己愛性・強迫性・統合失調型 PD の症状の平均的水準の高さは, 事前調査で測定した PD 傾向のみで説明されており, 回避性 PD の症状の平均的水準の高さのみ, PD 傾向と特性的な感情傾向で説明されていた。また, 症状の変動性の指標として MSSD を算出し, 各 PD の症状の MSSD を従属変数とした重回帰分析を実施した。その結果, すべての PD の症状の MSSD に対して, PD 傾向の関連はほとんどみられない一方で, 抑うつ傾向や不安傾向, 自尊感情といった感情的側面が関連していた。

	次に、個人内における PD の症状間および日常の感情状態との連動性について検討するために、レベル 1 におけるマルチレベル分析を実施したところ、ほとんどの PD の症状が互いに正の連動を示していた。また、抑うつや不安、ポジティブ感情(活動的快および非活動的快)の感情状態とも、大半の PD の症状は部分的に連動していることが示された。しかし、自己愛性 PD の症状のみ、感情状態と連動しておらず、感情とは独立してその症状が変化する可能性が示された。これらの結果をもとにネットワーク分析を実施した。図 1 より、各 PD の症状同士が比較的強く結びついている一方で、PD の症状と感情とのネットワークは相対的には弱く、PD 症状が独自のクラスターを形成していることが示唆された。 図 1 ネットワーク分析の結果 
5. 結論	予備調査の結果より、従来 PD 特性を測定するものとして使用されてきた項目には、「安定的特性」としての側面と時間経過で変化する「状態的側面」が混在していることが示された。本調査の結果では、PD の症状の高低は PD 特性と関連する一方で、日々の症状の変動性は感情的側面と関連することが示唆された。また、個人内の PD 症状は、感情とも連動していることが示唆されたものの、自己愛性 PD の症状は、他の PD とは異なり、感情的側面とは連動しにくいことが示された。 以上より、経験サンプリングを通じて、PD の症状の中には日内変動するものがあり、症状の平均的水準や症状の変動性に関連する要因はそれぞれ異なること、また、各 PD の症状と連動する PD の症状や感情的側面には違いがみられることが示された。今後は、特定の対人場面や状況によって PD の症状がどのように変動するのかを精査し、症状の生起メカニズムの詳細を明らかにする予定である。
6. 研究成果発表	本研究の成果は、日本心理学会第 90 回大会および日本パーソナリティ心理学会第 35 回大会で発表した後に、学術誌へ投稿する予定である。

以上